

# 道徳教育における「能力」と「道徳的価値」の 関連性についての一考察

—— モンゴルの初等教育における能力ベースの学習指導要領を中心に ——

Bayasgalan Oyuntsetseg

## 目次

1. はじめに
2. 現行の学習指導要領における「能力」の構成
3. 公民教育（道徳教育）における「能力」の構成
4. 結び

### 1. はじめに

モンゴルでは2014年に学習指導要領が改訂され、教科外活動「公民教育」の一環として『道徳』読み物教材<sup>1)</sup>に基づく道徳の授業が特設されてから2年が経過した。公民教育における道徳の授業で、現場の教員たちがどのようなことを課題と感じているのかを調べるため、筆者はモンゴル国立教育大学の教員の協力の下、2015年にモンゴル全国の小学校の970名の教員を対象にアンケート調査を実施した。この調査から、教員養成や教材、指導方法について従来から指摘されてきた課題改善に向けての取り組みが着実に進められていることが読み取れた。その一方、教材、学習環境、評価、学校全体としての体制作りの強化、教員養成などに、引き続き検討すべき課題も多く残されていることが明らかになった。その中で特に筆者が注目したのが、評価の問題である。その原因として、自由記述から教員間に技量の差が生じていることや、共通理解が不十分であることもうかがえた。知識の量だけではなく、児童の能力・意欲まで評価の対象が広がったことも大きな原因であると考えられる。多くの教員が「公民・道徳」の授業に対する児童の受け止めによい状況にあると評価しながら、学習の成果を適切に評価することについて、問題を抱えていることが明らかになった。そこで本稿では、共通理解の基となる概念である「能力」を軸として編成されている現行の学習指導要領における「能力」の概念や、「公民教育」（道徳

1) 『道徳』読み物教材は、カラフルでイラストが多く、児童の関心を引く、分かりやすい内容になっており、ねらいに焦点をあてた質問も設定され、物語、昔話、会話、詩などの形で書かれたテーマ毎に、「話し合おう」、「実行しよう」、「学んだことを再確認しよう」といった欄が設けられている。教員には、教材を効果的に活用するための使用上の留意点や授業展開の参考例などを提示した教員用の指導書も配布されている。

教育)で育成するとしている「能力」の構造とその特徴を取り上げ、最後に、今後検討すべき課題について考察することを目的とする。

## 2. 現行の学習指導要領における「能力」の構成

OECD(経済協力開発機構)をはじめ、様々な組織や機関によって「新しい能力」の枠組みが提唱され、多くの国で「新しい能力」の概念に関心が高まっている。「新しい能力」の特徴は、第一に、認知的な能力だけでなく対人関係的な能力や人格特性・態度などを含む人間の全体的な能力に及んでいること、第二に、教育目標や教育内容として位置付けられ、教育の過程の中に深く入り込んでいることにある。現在、この概念は初等・中等教育から高等教育・職業教育まで広く普及している。この背景として、教育分野においても、教育の成果と影響に関する情報への関心がグローバルに高まっている事があげられる。

こうした世界的な潮流の中でモンゴルにおいても、2014年に能力ベースに学習指導要領が改訂されている。しかし、能力に関する論点はまったく目新しいものではなく、学校で学んだことを応用する能力について、以前から論じられてきたものである。今後も、知識の習得だけでなく、知識を活用する能力を如何に育成し、評価するかという検討は避けられない課題である。

わが国において、従来から様々な能力が教育法や学習指導要領で用いられ、体験活動や社会奉仕活動など、様々な教科外活動を通じて学校で学んだことを応用できる能力の育成が推進されてきた。例えば、1998年の教育法<sup>2)</sup>で「教育の目標は健康的な身体、知識、法令を順守する人道的精神、道徳的、美的感覚、独学力、生活力を育てることにある」、現行の教育法では、「知識、道徳、基礎的な体力と、人道主義精神を尊重し、自立して学習、勤労、生活できる能力を育成する」と目標を定めている(モンゴル教育法第4条1)。2002年の初等中等教育法では、「教育の目標は、知的、道徳的、身体的能力を持ち、人道的規則を尊敬し順守し、自力で学習し、労働し、生活力がある人間を育てることにある」としている。

これらの条文から読み取れる通り、学校教育の目標は自立する上で必要な知識、能力、習慣を修得し、美的感覚、道徳観念、生活力を育てることにあつた。その中で最も重視された能力は生活力である。多様化が進む社会の中で必要なことは、どのような場面に直面しても自律的に社会生活ができる能力だとされたのである。

さらに、2005年の学習指導要領(教育スタンダード)では、従来の知識偏重教育から人間形成重視への移行が図られ、そこで①知ることを学ぶ、②為すことを学ぶ、③人間として生きることを学ぶ、④(他者と)共に生きることを学ぶ、という四つの学習目標が示

---

2) 1991年に初めて「モンゴル人民共和国の教育法」が公布された。この法律は、社会体制改革前に、社会主義のモンゴル人民共和国で制定された最初で最後の「教育法」であった。同法は1991年から2016年の間に何回も改正されている。教育の目標について「知的水準が高く健康的で、公正および法令を遵守し、祖国および自然を愛し、美的感覚が豊かで、独学能力があり、生活・労働する力がある人間を育てることにある」(「1995年の教育法」『Ardiin erk』新聞、142号、1995年8月21日)、「健康的な身体、知的能力、法令を遵守する人道的な精神および美的感覚を学習させ、独力で学び、生活する能力を植え付けることにある」と規定している(Sh. Shagdar『モンゴル教育史』Bembisan出版、2000年、p. 298)

された。これは、1996年にユネスコの21世紀教育国際委員会編が世界の国々に、教育を再構築するための基本的な柱として提起した「学習の4本柱」を参考にしたものである。具体的には、②の「為すことを学ぶ」とは、仕事をするために必要な能力を身につけ、この能力を環境の変化に合わせて、常に開発する方法を学ぶことである。従って情報を処理し、多様な職場に関する知識を持ち、新しい状況に柔軟に適応できる力を養うことが教育カリキュラム開発の基本方針であるとされている<sup>3)</sup>。③の「人間として生きることを学ぶ」とは、他者の権利を尊重し、同じ地域、故郷、村、市に生活し、学習する力を養うことをいう。つまり、思想や居住地を問わずに、共同生活できる道徳的な習慣および行動を定着させることである。④の「共に生きることを学ぶ」とは多面的な開発、言い換えれば身体的、精神的、感情的、美的、道徳的な感覚を開発させることを言う。これは、それまで、主として知識中心の視点から行われていた生徒評価や知識編重の教育方法を改めたものである<sup>4)</sup>。従って、このような新教育スタンダードにより、学校でただ単に子どもの中に新しい知識を付加するだけではなく、子どもの知識や能力、理解力を育成することを通じて社会生活上のルールを身につけた人間を育成することが目標として定義されたといえる。これに伴い、「人間と社会」（小学校第1学年～5学年）、「人間と環境」（小学校第1学年～5学年）、「社会性」（中学校1学年～3学年）などの教科が新設された。

さらに、2014年改訂の学習指導要領により、各教科のカリキュラムが内容ベースから能力ベースに重点をシフトし、「能力」が中心的な理念となっている。ここで注目すべきことは、第一に、この能力は、従来一般的に取り上げられていた「生きる力」、「行動する力」などの能力より広範囲になっていること、また、第二に、児童一人一人の能力を開発し、伸長するために、一人一人の児童への細やかな対応及びそれぞれの能力に応じて授業をフレキシブルに構成することが教員に求められていることである。

次に、現行の学習指導要領における能力の構造について具体的にみていきたい。初等教育の目的を「①児童の認知的能力、②言語・社会的能力、③生きる力に関する総合的な能力を育てることにある」としている。これらの三つのコンピテンシーを習得することで児童は教育目標を達成することができると考えられている。学習指導要領の解説によると、ここでいう総合的な能力（又は、コンピテンシー）は多様な「基礎能力」を合わせたものである。「認知的能力」は、思考力、問題解決力、「言語・社会的能力」は、コミュニケーション能力、他者と共に学ぶ能力、「生きる力に関する能力」は、自立して学ぶ能力、情報と技術を活用する能力、衛生的習慣を習得する能力、自然に対し正しく接する能力といった「基礎能力」に分類される。基礎能力の枠組みの中では、「思考力」が中心的な能力になっている。学習指導要領では、思考力について、「思考力に基づき、各教科及び教科外活動の特別能力が開発される<sup>5)</sup>」と説明している。ここから「思考力」は、一人一人が自ら学び判断し、新しい知識を作り出す力であり、「問題解決力」、「コミュニケーション

3) 教育開発所教授法研究所『普通教育学校のカリキュラム』国営印刷所、1995年、pp.5-6

4) モンゴル教育文化科学省『初等中等高等教育スタンダード』Sod-press 出版、2003年、p.14

5) モンゴル教育文化科学省『初等教育指導要領』2014年、p.5

能力、他者と共に学ぶ能力」、「自立して学ぶ能力」、「情報と技術を活用する能力」など、他の多くの能力の前提となる能力としてみることができる。

さらに、基礎能力は、いくつかの「能力」に分類されている（表1参照）。ここでいう「能力」は、学習指導要領の解説によると、物事のやり方および実行上の慣習をいう。つまり、基礎能力を活用する行動パターンとして捉える事ができる。具体的には、「思考力」は、考える力（比較・関連づけ、整理し、まとめるなどの能力）、論理的思考力、創造的思考力という三つの能力に分類されている。「問題解決力」は、「問題を把握する能力」、「問題解決のオプションを考案する能力」、「問題解決オプションから最も良い方法を選択する能力」、「問題解決のオプションを選択した理由・根拠について説明する能力」に分類されている。学習指導要領では、能力の分類の例を学年毎に発展的に示している。

表1. 初等教育において開発する能力

基礎能力		第1から3学年	第4から5学年
能力			
思考力	・考える力 （比較・関連づけ、整理し、まとめるなどの能力）	・二つの事物を比較し、相違点を把握する能力 ・二つの事物の異なる性質を元に事物を分類する能力 ・事物を分類したり、まとめたりする能力	・複数の事柄を比較し、その相違点を見つける能力 ・複数の事柄を異なる性質を元に分類し、同じ性質を元にまとめ、その理由を説明する能力
	・論理的思考力	・出来事、事柄の変化の理由、関連性を把握する意欲を持ち、努力する能力	・物事の変化の理由、因果関係を把握し、説明する能力
	・創造的思考力	・事柄を行う新しい創造的なアイデアを考案する能力	・新しい創造的なアイデアを考案し、立証する能力
問題解決力	・問題を把握する能力 ・問題解決のオプションを考案する能力 ・問題解決オプションから最も良い方法を選択する能力 ・問題解決のオプションを選択した理由・根拠について説明する能力	・仲間が直面している問題を把握する能力 ・自分の経験に基づき問題を解決するために適切なオプションを挙げる能力 ・問題を解決する適切なオプションを選択する能力 ・問題解決のオプションを選択した理由・根拠について説明する能力	・家族、学級、学校で解決すべき問題を提案し、その理由を説明する能力 ・証拠と情報に基づき、問題を解決するオプションを定義する能力 ・オプションを選択し、比較する能力 ・オプションを選択し、証拠と関連情報に基づき、その理由を補強し説明する能力
コミュニケーション能力	・他者の意見を聞く	・他者の話を注意して聞く意義を理解する能力	・他者の話を聞き、理解する能力
	・他者を尊重する	・他者を尊重していることを言葉・行動・態度で示し、適切に接する能力	・適宜に敬語を使い、和やかな関係を作る能力
	・他者と接する時に、適切な言葉を用いる	・適切な言葉や表現を習得する能力 ・各教科の内容に関する言葉や表現を習得する能力	・他者に対し適切な表現・言葉を正しく用いる能力 ・自分の考えを説明し、表現する時に適切な表現・言葉を用いる

<p>他者と共に学ぶ能力</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・他者とチームで働く能力</li> <li>・他者からサポートを受け取り、他者をサポートする能力</li> <li>・感情を表現し、コントロールする能力</li> <li>・自分の学びたいこと、興味・関心のあることを表現する能力</li> <li>・自分の行動をコントロールし、物事を最後までやり遂げる能力</li> <li>・他者に自分の意見を表現する能力</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・他者と協働し、互いを助け合う能力</li> <li>・自分の理解していない、できないことについて他者のサポートを求める能力</li> <li>・自分の感情を言葉・行動・態度で正しく示す能力</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小グループ（3-4人）で協働し、グループの問題解決に貢献する能力</li> <li>・自分のできることで他者をサポートする能力</li> <li>・自分の感情を正しく表現し、他者に対し、悪い影響を与えないように努力する能力</li> </ul>
<p>自立して学ぶ能力</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の学びたいことや、興味・関心のあることを表現する能力</li> <li>・自分がどのように学ぶかを企画し、実行する能力</li> <li>・自分の行動をコントロールし、改善する能力</li> <li>・事柄を最後までやり遂げる能力</li> <li>・他者に対し自分の意見を表現する能力</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の希望、感心・興味について、身近な人に話し表現する能力</li> <li>・学ぶために何をすべきかについて企画する能力</li> <li>・自分のできないことについて把握する能力</li> <li>・自分の考えていることを実行し、できたことやできなかったことについて他者に話し、表現する能力</li> <li>・他者の協力を得て、事柄を最後までやり遂げる能力</li> <li>・自分の考えを、完成した文書で表現する能力</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・どのような知識、能力を習得すべきかについて定義する能力</li> <li>・自分の知らないこと、できないことを如何に習得すべきかについて、自分の現状に基づいて定義する能力</li> <li>・自分の学びの成果を定義し、自分の犯した過ちの理由を把握する能力</li> <li>・事柄を自立して行い、我慢強く問題を解決する方策を見つける能力</li> <li>・自分の意見を表現する際に多様な情報を活用する能力</li> </ul>
<p>情報と技術を活用する能力</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教室、学校や身の回りにある標記、記号などを識別し、用いる能力</li> <li>・事柄を行う上での技術についての指導書や説明書を読解し、用いる能力</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・身の回りの標記、記号を識別する能力</li> <li>・教員の指示を理解し、それを如何に実行するかについて他者に説明する能力</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・標記、記号、規範を守る能力</li> <li>・指示書、指針などを読解し、自ら必要なオプションを考案し、遵守する能力</li> </ul>
<p>習得する能力</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・衛生規範について理解する</li> <li>・衛生規範を遵守する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日常生活で守るべき衛生規範に関する知識を習得する能力</li> <li>・家庭や学校などにおいて衛生規範を守る能力</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・健全で衛生的な習慣は、健康を維持する上で重要であることを理解する能力</li> <li>・日常生活で衛生規範を守り、習慣化する能力</li> </ul>

く 自 然 に 対 し 正 し く 接 す る 能 力	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自然環境を理解し、感じる</li> <li>・自然環境に影響しているものを把握する</li> <li>・自然保全に参加する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地元の自然の特徴について知り、大事にする</li> <li>・地元の自然に影響する事柄について知る</li> <li>・地元の自然保全に参加する意欲</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・祖国の自然の特徴を知り、大事にする</li> <li>・祖国の自然に影響する事柄について例を挙げて説明する</li> <li>・祖国の自然保全に参加する</li> </ul>
--	--	---	---

出典：モンゴル教育文化科学省『初等教育指導要領』2014年、pp.5-7

以上の基礎能力以外に、「特別な能力」も設定されている。これは、各教科特有の能力を指す。この特別能力は学習指導要領の説明をみると「初等教育課程で当該教科の特徴などにあわせて児童が習得する能力<sup>6)</sup>」である。例えば、他者関係や社会、自然について指導する「人間と環境」、「人間と自然」、「人間と社会」教科で以下の能力を育成するとしている（表2参照）。

表2. 「人間と環境」、「人間と自然」、「人間と社会」教科で育成する能力

教科名	基礎能力	特別な能力
・人間と環境	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コミュニケーション能力</li> <li>・他者と共に学ぶ能力</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・身の回りの環境に興味を持ち調べる</li> <li>・規則、ルール、規範を遵守する</li> <li>・他者とコミュニケーションをとり、道徳的価値を尊重する</li> </ul>
・人間と自然	<ul style="list-style-type: none"> <li>・他者と共に学ぶ能力</li> <li>・自立して学ぶ能力</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・仮説を立てる</li> <li>・実験、観察、行動計画を立てる</li> <li>・計画したことを実行する</li> <li>・情報を処理する</li> <li>・結論をまとめる（意思決定をする）</li> </ul>
・人間と社会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・情報・技術を活用する能力</li> <li>・衛生的習慣を習得する能力</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・他者とコミュニケーションをとり、協働する</li> <li>・問題を解決する</li> <li>・社会・歴史的出来事を理解する</li> <li>・道徳的価値を尊重する</li> </ul>

出典：モンゴル教育文化科学省『初等教育指導要領』2014年、p.23

学習指導要領では、それぞれの教科で育成する「特別な能力」が学年ごとに例示されている。例えば、小学校第4学年～第5学年の「人間と自然」では、以下の能力が挙げられている。

表3. 小学校第4学年～第5学年の「人間と自然」教科で育成する特別な能力

特別な能力	第4から5学年
・仮説を立てる能力	<ul style="list-style-type: none"> <li>・何が、いつ、どこで、どのように変化しているか、変化するかといった問題を提起し、課題を提起する</li> <li>・データや証拠などを用いて問題を他者に分かりやすく説明する</li> <li>・自分の経験、日常生活の出来事に基づき、仮説を立てる</li> </ul>

6) モンゴル教育文化科学省『初等教育指導要領』2014年、添付資料「学習指導要領用語説明表」

・行動を企画する能力	<ul style="list-style-type: none"> <li>・仮説を証明するためにどのようなデータや情報が必要かについて他者と話し合い、協議する</li> <li>・何を、どのように、いつ、誰とすべきかを計画し、観察・試行・実験の計画を立てる</li> <li>・(以下省略)</li> </ul>
・計画を実現する能力	<ul style="list-style-type: none"> <li>・観察・実験を計画通りに実行し、必要に応じて改善する</li> <li>・安全な行動について他者に忠告し、アドバイスする</li> <li>・(以下省略)</li> </ul>
・情報を処理する能力	<ul style="list-style-type: none"> <li>・仮説の証明、課題の解決に必要な情報が十分であることを確認する</li> <li>・観察・実験の結果について意見を述べる</li> <li>・観察・実験の結果を他者に紹介する効果的な方法を選択する</li> <li>・(以下省略)</li> </ul>
・結論を出す能力	<ul style="list-style-type: none"> <li>・観察・実験の結果について結論をまとめ、新しい知識を創造する</li> <li>・観察・実験の結果を評価する、目標を達成できたかを確認する</li> <li>・(以下省略)</li> </ul>

出典：モンゴル教育文化科学省『初等教育指導要領』2014年、pp.32-33

以上のように、現行の学習指導要領で規定されている「能力」は、教育目標としてのゴールである「統合的な能力」(コンピテンシー)、各教科横断的な「基礎能力」、基礎能力を更に細分化した「能力」、各教科特有の「特別な能力」といった四つのカテゴリーに分類されている。

このような能力の枠組みは、OECDが提唱するキー・コンピテンシーの能力観や、PISA型リテラシーで強調される能力、さらには21世紀型スキルとして世界で注目されている能力群を参考に構成されている。

### 3. 公民教育(道徳教育)における「能力」の構成

公民教育は教科外活動として「コミュニケーション能力」、「社会における望ましい態度」、「他者や自然に対する望ましい態度」の育成などを目的として、2005年に設けられている。

2014年度版の学習指導要領では、公民教育のプログラムの中で「道徳性の要素」と発達の捉え方がはじめて明確に示されている。心情や感動が道徳の実践に大きく影響するとし、日本の学習指導要領と同様に道徳性が道徳的心情、道徳的判断力、道徳的实践力、道徳的態度というプロセスを通じて育成されると定義している。それに伴い、「道徳的心情は道徳的価値の大切さを感じ、善行を喜び、悪行を拒む心情」<sup>7)</sup>とし、道徳的心情を重点とした指導が重視されている。従って、「共感」、「情動」に働きかけ、児童が自ら価値を発見したり、感じ方や考え方を深めたりするような、読み物形式の資料が開発されている。道徳の読み物教材が発行されてから、公民教育は「道徳性の育成」に重点を置いた活

7) モンゴル教育文化科学省『初等教育指導要領 指導書』2014年、p.124

動としての視点が一層強くなっている。だが、教育現場では依然としてどちらかというところ「道徳教育」より「公民教育」の用語のほうが多く用いられている傾向がある。

道徳の読み物教材を中心に、公民教育の中で進められている「道徳」の授業は、『初等教育指導要領指導書』における道徳性に関する記述を参考にすると「道徳的な心情、判断力、実践意欲と態度などを養う」<sup>8)</sup>、「児童の心により良く生きたいという要求を高め、人間の生活における善悪について自ら考え、自ら判断し、自ら善行を行う誓いを立て実行できるようにする」<sup>9)</sup>ことを主たる目標としている。この点では、公民教育における「道徳」の授業は日本の道徳教育の目標と近い。読み物資料は、読むだけでなく、主体的に教材にかかわるようになってきている。これにより、共感、感動など、児童の情動面に働きかける授業が推奨され、児童自身が自ら道徳性を形成していけるような指導法が試みられている。一方、学習指導要領や、初等教育学習計画<sup>10)</sup>において、「公民教育」、「道徳教育」とははっきりと区別されておらず、「公民教育（道徳教育）」と表記されている。

初等教育課程で学習支援活動としての公民教育の目的を「一人ひとりの児童が正しく発達し、人格を備えた人間になるための意欲を育み、モンゴルの慣習、伝統的な価値観、将来への希望と信念、道徳性、性格の基礎を作る」<sup>11)</sup>とし、初等教育指導要領の指導書で「公民教育は、より良く生きたいという希望を持ち、正しいことや悪いことを認識し、能動的に考え、判断し、自ら目標を立て実現できる児童を育てる」<sup>12)</sup>ことと定めている。ここで重要なキーワードは、「意欲」、「希望」になっている。従って、「公民教育」で育成する「能力」は、「意欲」という言葉と一緒に使われている。

「能力・意欲」は、道徳の授業の一環で実施され、育成する「能力」としても捉えられる。一方、学習指導要領における公民教育で育成する「能力・意欲」を、「道徳」の授業の指導内容とみても差し支えない。公民教育で育成する「能力・意欲」の中に「公正・感謝・他者尊重」などの価値観も含まれている。

公民教育で育成する「能力・意欲」<sup>13)</sup>は、実践経験、行動様式の習得と慣習化の能力を重視した構成になっており、具体的には、表4に示すような四つの「能力・意欲」が挙げられている。ここで、「能力」としての行動面だけでなく、良い行いや成長するための「意欲」も取り上げていることが特徴的な点である。「意欲」という言葉は、公民教育の目標の中にも用いられている。「伝統的な行動規範を学び、文化を尊重する」に関わる「能力・意欲」は、第1学年から3学年と、第4から6学年の間に区切りがないのが特徴である。

従って、公民教育で育成する能力・意欲は、人格の形成、能力の開発、知識の伝授、文

8) モンゴル教育文化科学省、前掲書、p.124

9) 「公民教育 教員参考書 小学校第5学年」2014年、p.4

10) モンゴル教育文化科学省2014年6月3日付け第A/240号令「初頭教育学習計画」

11) モンゴル教育文化科学省『初等教育指導要領』2014年、p.62

12) モンゴル教育文化科学省『初等教育指導要領 指導書』2014年、p.125

13) 「意欲」を「能力・態度・習慣化した行動」として表現している教員参考書もある。モンゴル教育文化科学省『公民教育 教員参考書 小学校第2学年』2014年、p.4、モンゴル教育文化科学省『公民教育 教員参考書 小学校第5学年』2014年、p.4



化慣習の継承など幅広い範囲に及んでいる（表4参照）。また、自己のあり方から、身近な家族や友達との対人関係、そして自然や地球へと対象が広がっていくように内容が設定されている。ここで特徴的なのは、「伝統的行動規範、文化」に関する知識と実践力を扱っている点である。伝統的行動規範として「畜産業」、「自然保全の慣習」などモンゴルに特有な行動規範を取り上げており、道徳的価値観の発達をモンゴル固有の行動様式の習得を基盤として捉えている点は旧学習指導要領から一貫している。

表4. 初等教育の公民教育で育成する能力・意欲

能力・意欲	第1から3学年	第4から6学年
・伝統的な行動規範を学び、文化を尊重する	・年長者を敬う。先生と学問・知識を重視する。父母の愛情に感謝し、尊敬する。父母のお手伝いをする。善悪に関する教えを守る。身・口・意の在り方の理解と自己を見直すなど。	
・自己を知り、礼儀正しく振る舞う	・自分のやりたいことを根気強くやり遂げる。希望と夢を持つ。良い行動習慣、公正さを重んじる。正しいマナーやルールを遵守する。	・自分を理解し欲求を制御する。よく考えた上で、話し行動する。目標を立て、達成するために努力する重要性を理解する。ルールと規則を遵守する。
・対人関係を構築する	・父母を敬愛する。挨拶、感謝、おわびについて学ぶ。先生と学問を大切にす。友達と仲よくする。自分の義務を果たす。自分の意見と同様に他者の意見も大事にする。学校のを大切にす。	・年長者を尊重し、幼いものの世話をす。先生と学校の職員を尊重し、良い対人関係を作る。外国人・外国の文化を尊重し、世界の平和と友情に貢献する意欲を持つ。公共財産を大切にす。
・自然や地球を大切にす、保護する	・動植物を世話する。自然の美しさを理解し、感動を表現する。	・自然を大事にする伝統・慣習を学び、自然と調和して生きることの意味を理解して実践する。

出典：モンゴル教育文化科学省『初等教育指導要領』2014年、p.62

#### 4. 結び

本稿では、現行の学習指導要領における「能力」の中身、「公民教育」における能力の構造について概観した。最後に、①「能力」と「価値」の位置づけ、②「価値」の明確化を中心に、今後、検討すべき課題について考察する。

##### 4.1 「能力」と「価値」の位置づけ

一般的に、世界各国の教育実践を見ると、能力、あるいは「コンピテンシー」という概念は、知識やスキル、価値観などの態度までを含むと認識されている。教育分野で能力とは、知識や態度・価値観なども含めた包括的な能力を指している。そのため、「能力」は「資質」という言葉と一緒に用いられることが多い。モンゴルにおいても、海外における「能力」の概念の影響を受けている。「能力」を軸として編成されている学習指導要領の内

容から、能力は、「知識」、「スキル」、「能力」だけではなく、「態度」や「価値観」も包含した言葉として用いられていることが分かる。

他国の教育実践をみると、参考になるコンピテンシーの構造（能力と価値観）のモデルの例が多くある。

ミャンマーでは、2015年に開発された新しいカリキュラムで「21世紀の学びのための5大能力」の中に、「道徳・倫理的能力」が挙げられている。「道徳・倫理的能力」は、価値観に基づいた知識を意味しており、具体的にはグローバルな認識と市民としての道徳的・倫理的・美的リテラシーが含まれている。

オーストラリアのナショナル・カリキュラムでは、汎用的能力として七つの能力が取り上げられており、その中に、倫理的な概念や価値観についての理解を通じて児童・生徒が身に付けていく能力を「倫理的理解」として別途設定されている。

ニュージーランドの「ナショナル・カリキュラム」は、「ビジョン」、「原理」、「価値」、「コンピテンシー」、「学習領域」という五つの要素から構成されており、卓越性、公正、誠実、尊敬などが価値として挙げられている。

シンガポールの教育省が打ち出した「21世紀型コンピテンシー」は、「価値」、「社会的・情緒的コンピテンシー」、「新興21世紀型コンピテンシー」の三つから構成され、それらは、「価値」を核として同心円状に配置されている。ここでは六つの価値観を21世紀型コンピテンシーの核として位置付けている。具体的には、尊敬、責任、誠実、配慮、回復力、調和などである。これらの国では、「価値」、「道徳・倫理的能力」といった枠組みを設けているという特徴がある。

一般的に、価値観は言うまでもなく行動の決断の際に、人間がある価値判断をする場合や物事を選択する場合、道徳的行動を実行しようとする場合に現れる。従って、能力の土台というべきものが価値観であり、価値観は人格の核心部分に位置するといえるであろう。このことは能力と価値意識の関係において決定的な意味を持っているように思われる。能力の中心にあって、人間の諸能力を生かす根幹部分は、何かということをおく必要がある。

モンゴルの現行の学習指導要領指導書では、「能力」が強調されており、重要な要素となっているが、「能力」の中に含まれている「価値」については、「道徳性が道徳的心情、道徳的判断力、道徳的実践力、道徳的態度というプロセスを通じて育成される」という定義にとどまっている。特に、道徳の授業では「能力」と「価値」の関連性を説明することは簡単ではない。それは、能力が高いと思われ、テストで高い点をとっている児童の生き方がしっかりしているかという点と必ずしもそうではないからである。「能力」と「価値」をどのように結びつけるかが、道徳教育で検討すべき重要な課題であると思われる。

現行の学習指導要領指導書では、物事を比較・関連づけたり、整理したり、まとめたりする思考力やコミュニケーション能力など、これらの根元にある価値観にも「能力」を付けて評価している。態度・価値観などを含む包括的な能力であればあるほど、全教育活動を通じて育成する価値観（価値項目）の定義をしっかりとしないといけないのではないか。

基礎能力の中にある、コミュニケーション能力は「他者の意見を聞く能力」、「他者を尊重する能力」、「適切な言葉を用いる能力」という定義だけで十分なのか。

例えば、上述した「人間と自然」（表4を参照）の教科を例に挙げれば、この教科の成果として児童が「仮説を立てる能力」、「行動を企画する能力」、「計画を実現する能力」、「情報を処理する能力」、「結論を出す能力」を習得することになっている。これらの能力の内容をみると、「企画、観察・実験、結論を出す能力」には触れられているが、自然を大事にすることそのものの価値観については記述されていない。「仮説を立てる能力」、「行動を企画する能力」、「計画を実現する能力」、「情報を処理する能力」、「結論を出す能力」について教えるだけで、自然と人間関係、人間としてのあり方や生き方に関する知識を習得できるのか。「観察・実験、企画、結論」ができる児童の育成を目指すか、自然を観察・実験するだけでなく、自然を大事にする児童の育成も目指すかによって、「能力」の中身が大きく異なってくるはずである。

#### 4.2 「価値」の明確化

上述した通り、モンゴルの現行の学習指導要領で児童が習得する諸能力を大分類し（初等教育で児童が習得する統合的な能力：①認知的能力、②言語・社会的能力、③生きる能力）、さらに中分類（全教科横断的な基礎能力）・小分類（基礎能力を細分化した能力）に分類し、解説している。具体的には、「基礎能力」の中核に位置付けられている「思考力」は、考える力（比較・関連づけ、整理し、まとめるなどの能力）、論理的思考力、創造的思考力という三つの能力に分類され、それぞれの内容について詳細に説明されている。基礎能力としての「コミュニケーション能力」は、「他者の意見を聞く」、「他者尊重」、「他者と接する時に、適切な言葉を用いる能力」といった三つの能力に分類され、それぞれの内容が説明されている。このように、「能力」は、各教科・教科外活動に共通する横断的な「基礎能力」、各教科特有の「特別能力」として分類され、学年ごとに説明されている。

一方、道徳の読み物教材を用いる公民教育の目標は「能力・意欲」として簡潔に記載されている。従って、公民教育の一環として行われる道徳の授業においても、「能力」と「意欲」が学習を成立させる基盤として捉えられている。

学習指導要領では、「意欲」についての説明はないが、「意欲」は学習意欲や実践意欲をどのように引き起こし、伸ばすかという従来の教育の最も切実な課題に関わっている。「意欲」は行動を方向づけ、持続させるもの、学習の課題を追究していこうとする学習意欲、さらに自ら進んで何かをしようとする思いとして捉えられる。そういう意味では、「意欲」は、道徳の授業では、「道徳的実践意欲」と表現することができる。一方、「能力」については、学習指導要領では、「行動や意思決定に関する技能、習慣化した行動」<sup>14)</sup>と定義されている。公民教育で育成する「能力・意欲」は具体的には、①「伝統的な行動規範を学び、文化を尊重する」、②「自己を知り、礼儀正しく振る舞う」、③「対人関係を構築

14) モンゴル教育文化科学省『初等教育指導要領』2014年、p. 66

する)、④「自然や地球を大切に、保護する」という四つのカテゴリーに分類されている。それぞれのカテゴリーの内容をみると、「能力・意欲」は、知識、価値、能力、態度をも含めた包括的な構造になっていることが読み取れる。

しかしなら、「能力」の説明は、「能力」を具体化するための行動パターン（問題発見、情報集取集など）の説明に限られている。道徳の読み物教材を用いる公民教育においても、学ぶべき価値である家族愛、生命尊重、誠実、優しさ、思いやり、いたわる心などの「心情」を「能力・意欲」のカテゴリーの中に並べているだけで、価値項目について説明がないことに留意すべきである。筆者は、この点に問題を感じている。「能力」に加えて、「道徳の内容項目（価値項目）」についても詳細に記載する必要があるのではないか。

そうすれば学習の成果を適切に評価するよりどころともなると考える。

ここでは、小学校の低学年、中学年、高学年のそれぞれのレベルにおいて、価値項目がどのような意味を持つのかについて説明している日本の教育実践が一つの好例である。具体的には、以下のことがわが国にとって大いに参考になる。第一に、日本では、価値項目の内容を分かりやすくするために工夫している。価値項目を、「自分自身」、「他の人」、「自然」、「集団や社会」といった四つの視点から捉え、価値項目を（小学校第1から2学年15項目、第3から4学年18項目、第5から6学年22項目、中学校23項目）整理し、さらに学年毎に発展的に示している点である。

具体的に、「礼儀」という価値項目を取り上げ一例をみてみよう。文部科学省「小学校学習指導要領解説・道徳編」では、「礼儀」について「関連の説明」<sup>15)</sup>と、「全体的な理解」というように二つに分けて詳細な説明がされ、各学年の段階における重点などについて書かれている。また、道徳教育の項目「2 主として他の人とのかかわりに関すること」に関する価値項目の1は「礼儀」に関するとして、低学年<sup>16)</sup>、中学年<sup>17)</sup>、高学年<sup>18)</sup>毎の内容を例示している。さらに2015年一部改正学習指導要領において「特別の教科 道徳」では、正直、誠実、公正などの徳目のキーワードが明記されている。価値項目の全体的な説明と、発達段階毎の説明（指導内容）を発展的に示し、キーワードで整理しているところが、わが国にとって参考になる。

「能力」と「価値」の構成、公民教育（道徳教育）における「能力・意欲」の定義について、以上、述べた問題点を、筆者の今後の研究課題として捉え、諸外国の教育実践にも注目しながら、研究を進めようと考えている。

15) 「他の人とのかかわりにおける習慣の形成に関するものであり、状況をわきまえて心説明のこもった適切な礼儀正しい行為ができる児童を育てようとする内容項目である。主に、第3・4学年の2の(1)及び第5・6学年の2の(1)と深くかかわっている」(文部科学省「小学校学習指導要領解説・道徳編」2008年8月)

16) 「健康や安全に気を付け、物や金銭を大切に、身の回りを整え、わがままをしないで、規則正しい生活をする」

17) 「礼儀の大切さを知り、だれに対しても真心をもって接する」

18) 「気持ちのよいあいさつ、言葉遣い、動作などに心掛けて、明るく接する」(文部科学省「小学校学習指導要領」(2008年3月))

**参考文献**

- モンゴル教育文化科学省『初等教育指導要領 指導書』Colorful 出版、2014 年  
モンゴル教育文化科学省 2014 年 6 月 3 日付け第 A/240 号令「初頭教育学習計画」  
モンゴル教育文化科学省『初等教育指導要領』2014 年  
モンゴル教育文化科学省『公民教育 教員参考書 小学校第 5 学年』2014 年  
文部科学省『小学校学習指導要領解説・道徳編』2008 年 8 月  
文部科学省『小学校学習指導要領』2008 年 3 月  
文部科学省『平成 27 年一部改正学習指導要領』2015 年 3 月  
田中義隆『21 世紀型スキルと諸外国の教育実践』明石書店、2015 年  
松尾知明『21 世紀型スキルとは何か』明石書店、2015 年

(キーワード：道徳教育、評価、能力、価値観)